

『一読三歎当世書生気質』に使われている外来語

～「初版」と「選集版」との外来語の語形変化を中心に～

山下洋子

1. はじめに

『当世書生気質』は、正式には『一読三歎当世書生気質』（以下、『書生気質』）という。坪内逍遙が春のやおぼろ名義で書いた長編小説であり、1885（明治18）年～1886（明治19）年に刊行された。分冊形式の17冊完結で、晩青堂から発行された。1冊につき1～2話が掲載されており、17冊全20話である。最初に作者による「はしがき」があり、第9回と10回の間には、作者のことがあがる。ここにも外来語が見られる。それぞれの回のタイトルは次のとおり。

- 第1回 鉄石の勉強心も変るならひの飛鳥山に物いふ花を見る書生の運動会
てつせき べんきやうしん かは あすかやま もの はな み しょせい うんどうくわい
- 第2回 謹慎の気の張弓も弛む。不図だ目に淡路町の矢場あそび。
きんしん き はりゆみ ゆる とん め あわちやう や ば
- 第3回 真心もあつき朋友の粹な意見に額の汗を拭あへぬ夏の日の下宿住居
まごころ ともだち すみ いけん ひたい あせ ふき なつ ひ げしゆくすまゐ
- 第4回 収穫も絶えて。涙の雨の降つづく。小町田の豊作不作
とりいれ た なみだ あめ ふり こまちだ できふでき
- 第5回 心の猿の悪戯にて纏初し恋の緒のむかしがたり
こころ さる いたづら もつれそめ こひ いとぐち
- 第6回 詐は以て非を飾るに足る善悪の差別もわかうどの悪所通ひ
いつはり もつ ひ かざ た ぜんあく けじめ あくしやがよ
- 第7回 賢と不肖とを問はず。老と少とを論ぜず。たぶらかしぎしきの客物語
けん ふしやう と せう せう ろう ろん せやくものがたり
- 第8回 雨を凌ぐ人力車はめぐりへて。小町田が田の次に逢ふ再度の緒。
あめ の じんりきしや こまちだ た じ あ さいど いとぐち
- 第9回 一得あれば一失あり一我意あれば一理もある書生の演説
とく がい じつ しょせい えんぜつ
- 第10回 生兵法大きな間違をしでかして味方をぶちのめす書生の腕立
なまびょうはふおほ まちがひ みかた しょせい うでたて
- 第11回 つきせぬ縁日のそゞろあるきに小町田はからずも旧知己にあふ
えんにち こまちだ わかしなじみ
- 第12回 学校から追出される。親父の送資は絶える。どこでたつ岡町に懶惰生の翻訳三昧
がくかう おひだ おやぢ しおくり た おかちやう なまけもの ほんやくさんまい
- 第13回 心の宵闇に有漏路無漏路を踏迷ふ男女の密談
こころ よひやみ うろ むろ ふみまよ なんによ みつだん
- 第14回 近眼遠からず駒込の温泉に再度の間違
きんがんとお こまごめ おんせん さいど まちがへ
- 第15回 旧人を尋める新聞紙の広告に。児鳥ゆくりなく由縁の人を知る
ふるき たづ じんぶんし くわうこく かほどり ゆかり ひと し
- 第16回 黒組の薄羽織の媒分にて。薄からぬ縁因をしる守山と倉瀬の面談
くろぐみ うすばをり なかだち うす えにし もりやま くら せ めんだん
- 第17回 文意を文字通りにみや賀の兄弟そゞろにコレラ病の報知におどろく
ぶんい もじどほ が きやうだい びやう ほうち
- 第18回上下 春ならねども梅園町に心の花の開けそむる。親と女との不思議の再会
はる うめぞのちやう こころ はな ひら おや むすめ ふ しぎ さいくわい
- 第19回 全編総て廿回脚色もやうへに塾部屋へ倉瀬の急報
ぜんべんすべ くわいしくみ じゅうべ や くら せ きふほう
- 第20回 大団円
だいだんえん

榎垣（1963）および米川（1985）は、明治時代に見られる外来語の特徴を説明する中で、『書生気質』で書生のことばとして見られる「書生英語」を取り上げている。例えば、榎垣（1963）は、幕末から昭和までに使われた外来語を「文明開化期」「欧化と反動期」「新文化誕生期」「新文化発展期」の4つの期間に分け、その中の「文明開化期」の特徴的な外来語の使用例として『書生気質』をあげており、『書生気質』の文中に見られる外来語について、以下のようにまとめている。

この文でかたかなで書かれている語が、当時の外来語で、ひらがな・漢字にルビを打ったのは、混用英語だろうと考えられるが、ランプ・フラスコなどのオランダ語系の語には漢字書きもまじっている。

また、辻村（1992）は、太平洋戦争後に日本に英語（米語）が氾濫したことで、「英語を起原とする外来語がわれわれの生活語彙の中にそれ以前に比して大きなウエイトを占めるようになってきている」と述べ、その状況と「明治維新以後欧米の文物の輸入に伴って外国語・外来語が跋扈した」明治時代の状況が酷似しているとしている。そのうえで初版の『書生気質』に示されている外国語・外来語の抜き出しを行っている。このように、いくつかの先行研究によって明治時代の外来語使用の一端を知る資料として『書生気質』が取り上げられている。

『書生気質』は初版（以下「初版」とする）以降、いくつかの版が発行されている。そのうち、1926年～1927年に春陽堂から発行された『逍遙選集』（以下、「選集版」とする）に掲載されたものは、緒言に以下のようにあり、著者の坪内逍遙が校正し手を加えている。

著者が一回だけは綿密に校正して下されて、誤脱、衍字、仮名ちがひ、句読の誤り等までも訂して下されましたので、在りふれた複版本とは全く別なものになったとお信じ下さい。

こうした資料の特色をとらえ、木村（2015）は、「初刊本と『選集』の本文の変容が、19世紀後半から20世紀前半にかけて見られる言語変化の資料となる可能性を見出すために「初版」と「選集版」の使用語の対照を行っている。

本稿では、外来語の語形が明治から昭和にかけてどのように変化していったのかを探る1つの方法として、『書生気質』の「初版」および「選集版」に使われている外来語を抜き出し、語形の変化を調べる。前に述べたように「選集版」は「初版」同様、作者・坪内逍遙の手が加えられたものであるうえに、昭和初期に発行されたものである。木村（2015）にあるように「初版」と「選集版」の外来語を比較することで、坪内逍遙個人の外来語語形認識の変化とともに、明治と昭和の外来語の語形の違いも知ることができると考えられる。

『書生気質』の外来語についての先行研究は多くあり、「初版」と「選集版」との本文の異同についてのべた研究も見られるが、本稿でまとめるような『書生気質』に掲載されている外来語の「初版」と「選集版」との語形の違いについて述べた先行研究は見当たらない。

本稿で扱うテキストは、「初版」は国立国会図書館所蔵の晩青堂『書生気質』の第1号から第17号を使用した⁽¹⁾。また「選集版」は、1926年～1927年発行の春陽堂のものを使用した⁽²⁾。

引用文の漢字表記は「常用漢字表」の字体に改めて示す。「常用漢字表」に掲載のない漢字は康熙字典体とした。かなづかいは、原文のとおりにした。

2. 「初版」と「選集版」との違い

2.1 調査内容

調査の結果、『書生気質』の「初版」「選集版」どちらかに見られる外来語の延べ語数は662語。異なり語は383語。このうち、「初版」と「選集版」とで語形が異なるのは延べ301語、異なり語は178語である（漢語・和語から外来語に変更したもの、外来語から漢語・和語に変更したものも含めた数）。なお、外来語として取り上げた語は、現代の日本語で書く場合にカタカナで書かれることが多いものを中心としたが、「襦袢」「金巾」「煙草」「煙管」「てんぷら」など、漢字あるいはひらがなで書く慣用が定着しているものの、由来は外来語であるものも含めた。ただし、「喇叭」「お転婆」「獵虎」など語源不詳のものは取り上げなかった。また、『書生気質』の外来語にはアルファベットで表記されているものも含まれている。多くはカタカナでその原音の読みと日本語の意味とが示されているが、一部、アルファベット表記のみのものや原音の読みがカタカナで示されているだけのものもある。それらも今回は外来語として取り上げた。

例えば、以下のようなものである（いずれも「初版」の語形）。

Tom Brown at Oxford（小説の名）

Extremes justify the means

（エクストリムス ジヤスチフワイ ゼ ミインス）

また、「南無亜アメン」「弾正大弼タルトル〔海亀〕入道」「ノロウキング」など外来語を含む造語のようなものも外来語としてカウントした。

2.2 外来語の示し方の違い

まず、最初に「初版」と「選集版」の全体をとおした外来語の示し方の違いをまとめる。ここでいう「示し方」とは外来語の語形ではなく、外来語がどのように表記されているかということである。すなわち、現代では、欧米から流入した外来語の多くをカタカナで示すことが一般的である。「選集版」では、現代と同様カタカナ表記されているが、「初版」では漢字とカタカナの交ぜ書きの語が見られるなどの違いがある。そうした違いをまとめる。

まず、表1のように「初版」では外来語のカタカナ表記に、その意味を表す語や句が〔 〕で記され、そこにひらがなで日本語の読みあるいは意味を示す語がルビとして示されている。一方、「選集版」では、「初版」で〔 〕に入れて示された語や句に、外来語がカタカナのルビとしてつけられている。

表1 「初版」と「選集版」との違い①（五十音順）

初版	選集版
ストラッグル〔くるしみ〕	ストラッグル くるしみ
デンゼラス ^{けんのん} 〔剣呑〕	デンジエラス 剣呑
フハザア ^{おとつさん} 〔家大人〕	ファザア 家大人
フホルリイ〔おろかな ^{おこなひ} 行為〕	フオ ^{リイ} おろかな行為
ユニテイ ^{ひとまとめ} 〔統一〕	ユニテイ 統一
リイゾン〔道理を弁別する力〕	リーズン 道理

「初版」にも漢語にその意味を示す外来語がルビで示されているものがある。しかし、「選集版」の漢字につけられた外来語のルビはすべてカタカナなのに対して、「初版」のルビにはひらがなのものと、カタカナのものとが見られる。例えば、表2のように「初版」でひらがなルビがつけられており、「選集版」でカタカナルビに変更されているものがある。

表2 「初版」と「選集版」との違い②（五十音順）

初版	選集版
ごうると 黄金	ゴールド 黄金
どる 洋銀	ドル 洋銀
ほりしい 政略	ポリシイ 政略

また、「初版」では、カタカナ表記の一部に漢字が使われているものが見られるが、「選集版」では、漢字の音読みを外来語の表記に使っている例は見られない。例えば、表3のとおりである。

表3 「初版」と「選集版」との違い③（五十音順）

初版	選集版
淫モウラル波アチイ ^{ほうとうれん} 〔放蕩連〕	インモーラル パーチイ 放蕩連
句レイク	クレイク
駄アウ井ング	ダーウイン
比ストリイ ^{れきし} 〔歴史〕	ヒストリー
モ子イ	マネイ

「初版」では日本語で示されているのに対して、「選集版」では外来語に直されているも

のも見られる。例えば、第3回「真心もあつき朋友の粹な意見に額の汗を拭あへぬ夏の日の下宿住居」で、いずれも書生のことばとして「初版」で「妹」「^{いもと}慈母さん」とあるが、「選集版」では「^{シスタア}妹」「^{マザア}慈母」と変更されている部分がある。もともと「初版」で「シスタア」「マザア」と「いもと」「おっかさん」が混在していた場面であり、「選集版」で書生のことばとしていずれも外来語に統一されたということだろう。

なお、「初版」と「選集版」とで示し方に違いはないが、『書生気質』の特徴として話者および描かれる場面によって、同じ語でも外来語で示されたり、漢語で示されたり、和語で示されたりするということがある。例えば、「道理」は「リーズン」と示されている場合と、「道理」と示されている場合とがある。「^{おとつさん}厳父」「^{おつかさん}慈母」とある場面と「フハザア〔^{まごあ}おとつさん〕慈母」（「初版」の場合）とある場面とがある。外来語は書生のことばに限って使われており、その他の登場人物のことばや地の文では、外来語はほとんど見られない。地の文や書生以外のことばに見られる外来語は、「キセル」「ランプ」「マッチ」など江戸時代から使われているもの、あるいは、生活に根ざした物の名前である。

2.3 外来音ごとの違い

次に、「初版」と「選集版」の外来語の語形にはどのような違いがあるのかを、外来音ごとにまとめる。ここでいう外来音は「外来語の表記」（1991年・内閣訓令・告示）に示されているものとし、まとめる順番も「外来語の表記」に示されている順番とする。

実際は2.2で述べたように「初版」と「選集版」とは外来語の示し方自体が異なる場合もあるが、以下は、外来語の語形の違いを示すことを目的としているため、外来語の表記のみを抜き出す。なお、「外来語の表記」に示されている外来音のうち、以下に示すものに対応する語は『書生気質』には見られなかった。

対応する語がなかった外来音：

チエ、ツア、ツエ、ツオ、デュ、ドウ、イエ、クア、クイ、グア、グイ、グエ、グオ、フユ、ヴェ

また、外来音によっては、「初版」と「選集版」とで同じ表記を使っているものがある。そうした語についてはまとめて後述するが、以下のような外来音の表記である。

「初版」「選集版」とで同じ表記を使っているもの：

チ、テ（外来音「ティ」に対応する表記）、ツ（外来音「トゥ」に対応する表記）、チュ（外来音「テュ」に対応する表記）

2.3.1 外来音「シェ」「ジェ」に対応する語

まず、外来音「シェ」「ジェ」に対応する語である。カタカナ表記は表4のように変化している。

表4 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版	選集版	現代
シエ	シェ	シェ
ゼ、ジエ、ジエ	ゼ、ジエ、ヂエ、ジェ	ジェ

関連の語の表記は表5のとおりである。なお、以下、『書生気質』に見られる外来語を表に示す場合は、原語のアルファベット順に並べる。

表5 外来音「シェ」「ジェ」に対応する語

原語	初版	選集版
dangerous	デンゼラス デンジェラス	デンジェラス、 デンジェラス、 デンヂエラス
jealousy	ジエイラシイ	ジエラシイ
Shakespeare	シエイクスピア	シェークスピア
soothing agent	スウシングエジエント	スウシング エヂエント

「agent」「dangerous」など「選集版」では [dʒ] の音を「ヂ」で示しているものが見られるが「初版」では「ヂ」の使用は見られない。また、「gentleman」は「初版」「選集版」ともに同じ「ゼントルメン」である。

2.3.2 外来音「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」に対応する語

現代では「ファ、フィ、フェ、フォ」と表記されることが多い外来音の表記がどのように変化したかを見る。統一はされておらず、例外も多く、対応するカタカナの組み合わせの数も多い。

表6 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版	選集版	現代
フハ、フハ、フワ、ハラ	ファ、フハ、フワ	ファ
フヒ、フヒ、浮ヒ	フヒ、ヒ、フ	フィ
フヘ	ヘ、フェ	フェ
フホ	フホ、フォ	フォ

表7 外来音「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」の語と語形

原語	初版	選集版
confession	昆フヘツシヨ	コンフエツシヨ ⁽³⁾
definition	デフヒニシヨ	デフヒニシヨ
fallaciously	ハラシヤスリイ	ファレーシヤスリイ
fare	フヘヤ	フエヤ
father	フハザア	ファザア ⁽⁴⁾
fencing	フヘンシング	フエンシング
fifteen	フヒフチン	ヒフチン
five	フハイブ	ファイブ
folly	フホルリイ	フォリイ

表7のように、「初版」と「選集版」とで語形が違うものもあるが、「初版」と「選集版」で語形が同じものも見られる。例えば、「far」は、「初版」も「選集版」も「フハア」、「fart」(屁)は、「初版」も「選集版」も「フハアト」。なお「far」と同様に原音は [fa] だが「justify」は「初版」「選集版」とともに「フワ」である。⁽⁵⁾ 「confess」は「初版」も「選集版」も「コンフヘツス」であり。「defect」も「初版」「選集版」とともに「デフヘクト」である。また、「unfortunate」は「初版」「選集版」とともに [fo] の部分は「フホ」でゆれがない。⁽⁶⁾ 「finish」は、「初版」「選集版」とともに「フヒニツシユ」である。

[fa] [fe] [fo] は「選集版」に示されている語形に現代に近い「ファ」「フェ」「フォ」が見られるが、[fi] は、「選集版」でも現代に近い「フィ」あるいは「フィ」などの表記は見られず「ヒ」を使ったカタカナ表記が使われている。

なお、「フヒ」「フハ」のように、現代のカタカナ表記では見られない表記が「初版」にのみ見られる。

2.3.3 外来音「ウイ」「ウエ」「ウォ」に対応する語

現代でもゆれが残っている外来音である。NHK では [wo] は「ウォ」を使っているが、[wi] [we] は「ウイ」「ウエ」を使用している。また、新聞社・通信社では「ウイ、ウエ、ウォ」を原則としている。「サンドイッチ」「スイッチ」「スイミング」など「ウ」を省略する表記も使われる。マスメディア以外の表記では「ウイ、ウエ、ウォ」を使うことが多くなっている。

「初版」から「選集版」でも表8のとおり変化が見られる。「選集版」と現代では、同一の表記も見られる。

表8 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版	選集版	現代
ウ井、井	ウキ、ウイ、キ	ウイ、ウイ、イ
ウエ、エ	ウエ、エ	ウエ、ウエ
ウヲ、ヲ	ウオ、オ	ウオ、ウオ

個別の語で「初版」と「選集版」とで語形が異なる語は表9のとおり。

表9 外来音「ウイ」「ウエ」「ウオ」に対応する語

原語	初版	選集版
Cromwell	句ロンウエル	クロンウエル
Darwin	駄アウ井ング	ダーウィン
swimming	ス井ンミング	スキンミング
twenty	トエンチイ	トエンテイ、 トエンチイ
waist	ウエイスト	ウエイスト
watch	ウヲツチ	ウオツチ ⁽⁷⁾
water	ウヲータア	ウオータア
weakness	ウ井クネツス、 ウ井イクネツス、 ウ井イク子ツス、 ウ井イク子ス	ウキークネツス、 ウキクネツス、 ウキイクネス、 ウキークネス
weak	ウ井イク	ウイーク、 ウキイク
western country	ウエスタルンカントリー	ウエスタルン・カントリー
whistle	ホ井ツスル	ホキツスル
wit	ウ井ツト	ウイット
will	ウ井ル	ウイル、ウキル

「初版」では「ウ井」「ウエ」「ウヲ」あるいは、「ウ」が省略された語形を使うものが見られ、「選集版」ではそれらに変更されている。「選集版」では [wi] について、「キ」「ウイ」「ウイ」でゆれが見られ、中には「ウイット」「ダーウィン」のように現代広く使われている表記と同じものも見られる。

このほか「初版」と「選集版」とで、語形が同じものには「works」がある。いずれも「ヲウクス」である。なお、「外来語の表記」には説明のないものだが原音 [wa] は『増訂華英通語』(1860)では「wife」に「ウハイフ」が見られるなど、現代とは異なる古い語形が使われることもあるが、『書生氣質』では現在と同じ「ワ」が使われている⁽⁸⁾。

2.3.4 外来音「クォ」に対応する語

関連する語は1語である(表10)。「選集版」と現代では対応するカタカナは変化していないので、ここでは省いて、個別の語のみを記す。

なお、外来音「クェ」に対応する語は「初版」と「選集版」と現代で変化がないため、後述する。また、「外来語の表記」(内閣訓令・告示)には、「クァ」「クィ」についても示されているが、これに対応する外来語は『書生気質』にはない。

表10 外来音「クォ」に対応する語

原語	初版	選集版
quarrel	クラレル	クオレル

2.3.5 外来音「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」に対応する語

日本語の標準的な発音では、[v]音は[b]音と同じになるが、『書生気質』では外来音の[v]と[b]が違う音であることを表記で示すくふうが見られる。現代と「初版」「選集版」とで大きく語形が異なる外来音である。

表11 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版	選集版	現代
ウバ	バ	バ、ヴァ
ウビ、ビ	ヴィ	ビ、ヴィ
ヴェ	ヴェ	べ、ヴェ
ウボ	ヴォ	ボ、ヴォ

「ヴ」が期待される語については「love」が見られるが、「初版」「選集版」とともに「ラブ」または「ラーブ」である。また「five」は「初版」は「フハイブ」、「選集版」は「ファイブ」と語形は異なるが、[v]の部分「初版」「選集版」とともに「ブ」である。

個別の語は表12のとおりである。

表12 外来音「ヴァ、ヴィ、ヴェ、ヴォ」に対応する語

原語	初版	選集版
nervous	ネルウバス、子ルウバス	ナーバス
vacant	ヴェイカント	ヴェイカント
variety	ウバライヤテイ	バラエテイ
Venus	ウビイナス	ヴィナス
Victor Hugo	ウビクトル ユウゴウ	ヴィクトル・ユウゴウ
victim	ウビクチム、ビクチム	ヴィクチム
voice	ウボイス	ヴォイス

[v] 音を「ウバ」など「ウ」から始める表記は坪内逍遙が最初ではない。1811（文化8）年の『諳厄利亜興学小荃』で示されているアルファベットの読みでは「V」が「ウヒ」とあり、1867（慶応3）年『英学捷径七ツ以呂波』、1871（明治4）年『英字訓蒙図解』『英字三体大日本図画』『掌中洋学童子訓』では「ウイ」「ウイー」とある。なお、1902（明治35）年には文部省報告『国地名及人名取調』がまとめられ、[v] は「バ行」で示された（例：ベネチア、バスビオ、ベルサイユ、ビクトリア、ボルガ）。この説明には、「Vノ発音ハ左ノ如シ」として、「(甲)「ウ」(ラテン語)、(乙)「フ」(ドイツ語、オランダ語、ロシア語ノ語尾)、(丙)「ブ」(自余ノ国語)」とある。

2.3.6 原音 [r] [er] に対応する語

次に、現代では長音や促音で表記される語についてである。2.3.5でまとめた外来音「ヴァ、ヴィ、ヴェ、ヴォ」と同様、「初版」と「選集版」、現代とで違いがはっきりしているものである。

表13 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版	選集版	現代
ル	ー（長音符号）	ー（長音符号）

表14 原音 [r] [er] の語と語形

原語	初版	選集版
certificate	サルチフヒケイト	サーチフヒケイト
girl	ガルル	ガール
nervous	ネルウバス	ナーバス
Oxford	ラックスホルド	オックスホード
persuade	パルシユエイド	パーシユエイド
singer	シンガル	シンガー
Webster	ウエブストル	ウエブスター

つづりに「r」があるものは、「ル」をつけて表記されており、つづり字読みと言えそうだ。これは、「初版」の外来語に見られる大きな特徴である。こうした「r」のつく語についてのつづり字読みは『増訂華英通語』にも見られる。しかし、『増訂華英通語』では「タル」のように小書きで「ル」が示されている。

2.3.7 促音・長音の使用

表15 長音と促音の語形

原語	初版	選集版
beer	ビール	ビール
boyhood	ボーイフウド	ボーイ・フウド
love	ラブ	ラブ、ラブ
no matter	ノウ。マツタア	ノウ・マタア
romantic	ロウマンチツク	ロマンチツク
underwood	アンダルウッド	アンダルウッド
success	サクセス	サクセス

「初版」と「選集版」とで同じ語形のものも見られる。例えば「stone」は「初版」「選集版」とともに「ストーン」としており、現代の表記と異なっている。現代でも「イエローストーン⁽⁹⁾（地名）」の場合に長音をつけないこともあるが、単語としては「ストーン」である。

なお、伸ばす音の示し方に「初版」「選集版」と現代とで異なるものが見られる。現代では外来語の場合、ア列、イ列、ウ列、オ列の連続および、連母音のうち「エイ」「オウ」は伸ばす発音をし、表記は長音符号を使って示すことになっている。例えば、「シルバ^ー」「ポリシ^ー」「ユースフル」「ページ」「ノー」などである。しかし、「初版」「選集版」ともにこうした長音符号の使用が安定していない。長音符号を使わずに「シルバア」「ポリシイ」「ユウスフル」「ペイジ」「ノウ」などの表記が使われているものが見られる。「選集版」も必ずしも該当部分すべてで長音符号を使っているわけではないが、「初版」よりは長音の使用が見られる。「初版」と「選集版」とで語形が異なるものは表16のとおりである。

「初版」と「選集版」と表記が同じもので長音を使わない例は「スタンダアド」「ドランカアド」「ユウスフル」「シルバア」「ポリシイ」「フハザア、ファザア」「マザア」「ブラザア」「シスタア」「アットリイスト」「インツウ」「コウル」「ノウノウ」「リイブ」「シイ」「シクレットリイ」などがあり、長音を使っている例では「イー」「ボーン」「イーヂイ」「ウーマン」「トランスレーション」などがある。また、同じ語で表記がゆれているものもある。例えば「初版」「選集版」にはそれぞれ、「グウド／グード」「オンリイ／オンリー」「シンガア／シンガー」で両方の語形が見られる。

表16 長音符号の使用の有無

原語	初版	選集版
association	アツソシエイション	アツソスエーション
beef	ビーフ	ビーフ
concrete	コンクリイト	コンクリート
history	ヒストリイ	ヒストリー
horse	ハウス	ホオス
immoral party	淫モウラル波アチイ	インモウラルパーチイ
letter	レツタア	レター
negative	ニゲチイブ	ネガチーブ
positive	ポジチイブ	ポジチーブ
prostitute	プロスチチユウト	プロスチチユート
Shakespeare	シェイクスピア	シェークスピア
sleep	スリイブ	スリープ
three	スリイ	スリー
the student	ゼ、スチユウデント	ゼ・スチューデント
weakness	ウ井イク子ス	ウキークネス
weak	ウ井イク	ウイーク
western country	ウエスタルンカントリイ	ウエスタルン・カントリー

促音の使用については、現代は促音が入らないが「初版」「選集版」とともに促音が入っているものに「レッター」(letter)がある。「初版」で促音が入った語形が示されている「サクセツス」(success)、「マツタア」(matter)なども含めていずれも、スペルに同じアルファベットが並んでいる。スペル読みがされた結果、促音が入った語形が示されているようだ。

2.3.8 そのほか

次に「外来語の表記」(内閣訓令・告示)にはないものをまとめる。

2.3.8.1 母音のカタカナ表記

表17 加える母音の違い

原語	初版	選集版
money	モ子イ	マネイ
negative	ニゲチイブ	ネガチーブ

日本語の音節は開音節であり、原語に母音を示されていない場合でも、母音を付加して日

本語に取り入れる。表17の2例は「初版」と「選集版」とで、付加する母音が異なる例である。「初版」より「選集版」のほうが、現代の語形に近い。

このほか、「初版」と「選集版」とでは語形は同じだが、現代と異なるものもある。例えば「the」は、「初版」「選集版」とともに「ゼ」だが、現代では「ザ」である。

2.3.8.2 記号の使用

「初版」では語を区切る場合も、「・」ではなく「。」や「、」を使うなど、記号の使い方も現代とは異なっている。「選集版」では、記号は現代と同じで「・」を使っている。

2.4 「初版」と「選集版」とで外来語の表記が同じもの

外来音によっては「初版」と「選集版」とで表記が同じものも見られる。以下にまとめる。

2.4.1 外来音「ティ」に対応する語

現代では「ティ」となる語が多くなっている外来音である。該当の外来音の表記は同じだが、そのほかの部分で異なっているものもあるため、表では「初版」と「選集版」とわけて示す。

表18 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版・選集版	現代
チ、テ、テイ	チ、テ、ティ

表19 外来音「ティ」に対応する語

原語	初版	選集版
city	シチイ	
fifty	フヒフチン	ヒフチン
interesting	インテレスチング	
justify	ジヤスチフワイ	ヂヤスチフワイ
negative	ニゲチイブ	ネガチーブ
romantic	ロウマンチツク	ロマンチツク
stick	ステッキ	
tea	チイ	
thirty	サルチイ	サーテイ
twenty	トエンチイ	トエンテイ、トエンチイ
unity	ユニテイ	
variety	ウバライヤテイ	バラエテイ
victim	ウビクチム、ビクチム	ヴイクチム

現代では「ティー」「シティー」「ポジティブ」「サーティー」「ジャスティファイ」など「ティ」の発音・表記で固定されているような語でも、「初版」「選集版」とともに「チ」「テイ」を使用している。

「初版」と「選集版」とで [ti] の部分の語形が異なるものもある。例えば、「30」の意味の「thirty」は、現代では「サーティー」とカタカナ表記されることが多いが、「初版」では「サルチイ」、「選集版」では「サーテイ」である。「選集版」のほうが、現代の語形に近い「テイ」を使っている

2.4.2 外来音「ディ」に対応する語

外来音「ティ」同様で、現代では「ディ」と書かれることが多く、慣用が定着しているものは、「ジ」「デ」などの語形も見られる外来音である。

表20 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版・選集版	現代
ジ、ヂ、デ、デイ	ジ、デ、デイ

表21 外来音「ディ」に対応する語

原語	初版	選集版
Dickens	ヂッケンス	ヂッケンズ
dishonor, dishonour	ヂスオノア	
dismiss	ヂスミッス	
Disreali	ヂスレリイ	
idealism	アイデアリズム	アイデアリズム
idiot	イヂヲット	イヂオット
incredible	インクレヂブル	
lady	レデイ	
positive	ポジチイブ	ポヂチーブ
prejudice	プレジユヂス	プレジユジス
ridiculous	リヂキユラス	

「初版」と「選集版」では「ヂ」と「ジ」の違いが見られるが、この「ヂ」と「ジ」については、表記上区別していても日本語の発音としては「ジ」となることが多い。これらは同音と考へて、本稿では語形が同じグループとした。現代日本語では、一部の方言を除いて「ジ」と「ヂ」の発音上の区別は行われていない。そのため、現代の外来語の表記では「ジ」で統一されている。しかし、明治時代、大正時代、昭和初期まで「ジ」と「ヂ」両方の表記が行われていた。これが現代のように「ジ」に統一されたのは1941年である。

1941年4月から国民学校で使われる教科書で外来語のカタカナ表記が変更された。1941年3月23日の読売新聞（朝刊）に次のような記事が掲載されている。

ラジオと変る

廿年のラヂオにお別れ

この四月一日からラヂオからラジオと変る

RADIO がラヂオかラジオかは放送開始当時問題になり結局ラヂオといふことになつて廿年来常用されて来たが、こんどの国民学校教科書「ヨミカタ」をみると「ラジオノピアノガキコエテキマシタ」となつてゐるので、放送協会でも放送新体制は先づラジオからと云ふ訳で文部省と歩調を合せ四月一日から一切ラジオを用ひることとなつた。

1941年3月26日の読売新聞夕刊には、もう少しわしい記事がのっている。

カナ遣ひを統一

発音の再現より日本語化に重点

文部省・規正に乗出す

“ラヂオ”がよいか“ラジオ”がよいか，“ピ[○]アノ”が本当か，それとも“ピ[○]ヤノ”か，外国語に原語をもつ日本語のカナ遣ひについては目下のところなんの規定もなくてんでに自分の好みにまかせてかくといふ無統制状態におかれてゐるが，文部省では国民学校新教科書の全般的改編を機としてこれらの全く日本語化した外国語のカナ遣ひについて統一にのり出すことゝなりさしあたりこの四月から直ちに使用するヨミカタの「あさがほ」でラヂオをラジオとあらためピアノもピアノと改めたが，目下編纂中の上中級学年用の教科書をはじめ中等学校で使用する教科書についても画一的規正を行ふべく準備をすゝめてゐる文部省がこの大方針を決するにいたつた根本理由は東亜共栄圏に日本文化を押し進める直接の武器ともいふべき日本語を正しく純粋な形で保持しようといふ見地からいへばゆる外国語から転訛してきた日本語を改めて日本語として見直し，これに正しい形をあたへようといふのである。従つてラジオの場合は発音学上からいへば当然チの濁音であるヂであるべきだが，日本語特有のジの発音（DIでもなくまたZIでもないJI）をすべてジをもって表すこととなつたもので，従つてまた本来日本語にないヴァイオリンやヴェニスなどの作り字は一切排撃されてすべてバまたはベに統一されることとなるわけである（略）

「選集版」が発行された昭和初期でも、まだ「ヂ」と「ジ」の区別をしており、「ヂ」の表記が多く見られるということだろう。

また、原音 [di] には、現代「デ」で示されるものもある。『書生気質』には「idealism」が、「初版」では「アイデアリズム」、「選集版」では「アイデアリズム」で示されており、「di」の部分は「デ」が使われている。「idea」は、現代でも新聞社・通信社や放送では「デ」を使うことが多い。

2.4.3 イ列・エ列の次の「ア」

2.4.2で示した1941年の新聞記事には国民学校の教科書で「ヂ」が「ジ」に統一されたほか、「イヤ」も「イア」に統一されたことが示されている。しかし、『書生気質』では「初版」「選集版」とともにイ列、エ列の次の「ア」について1語を除いて「ヤ」で示している。「初版」と「選集版」とで語形が異なるのは「idealism」だけである。「初版」は「アイデアリズム」、「選集版」は「アイデアリズム」である。「初版」と「選集版」とが同じ語形のものには「フヘヤ」(where)、「ダイヤモンド」(diamond)、「ジニヤス」(genius)、「ヒヤヒヤ」(hear)、「ジンジンビヤ」(beer)などがある。

2.4.4 外来音「クェ」に対応する語

「クォ」については、2.3.4で説明したとおりである。また「クァ」「クィ」には対応する語はない。外来音「クェ」に対応する語は「question」のみである。「初版」「選集版」とともに「クエツション」の語形を使っている。現代では「クエスション」(『NHKことばのハンドブック第2版』2005・NHK出版)、あるいは「クエッション」の語形も見られる(『大辞林第4版』2019)。

2.4.5 外来音「トゥ」に対応する語

原音が[tu]のものを取り上げる。原音が[t]の語も「トゥ」となることが考えられるが、「初版」「選集版」および現代でも「ト」が使われており、変化がないため、今回は取り上げない。例えば、「初版」は「カントリイ」、「選集版」と現代は「カントリー」などの例である。

外来音「トゥ」に対応する語は、いずれも「ツ」が使われている。なお、外来音「ドウ」に該当する外来語は『書生気質』には見られない。

表22 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版・選集版	現代
ツ	ツ、トゥ

表23 外来音「トゥ」に対応する語

原語	初版・選集版
into	インツウ
to, too, two	ツウ

2.4.6 外来音「テュ」に対応する語

原音[tju]に該当する語である。表25の2例である。該当の外来音「テュ」に対応する部分は「初版」も「選集版」も「チュ」であり、「unfortunate」など原音[tʃ]と同じ表記が使われている。

表24 「初版」⇒「選集版」⇒現代の変化

初版・選集版	現代
チュ	チュ

表25 外来音「テュ」に対応する語

原語	初版	選集版
prostitute	プロスチチユート	プロスチチユート
student	スチュウデント	スチューデント

なお、「student」は、現代のカタカナ表記でも「テュ」が使われることは少なく、「チュ」を使った「スチューデント」が一般的である。

3. まとめ

『書生気質』に見られる外来語の語形を「初版」と「選集版」とで比較し、明治時代の外来語流入期にどのように外来音をカタカナで再現しようとしたのか、また、昭和に入って、それらがどのように変化したのか、語形の変化の一端を見ることができた。

すなわち、楳垣（1963）も述べているとおり明治時代には、耳から取り入れた外国語を外来語として使っていた。例えば、[va] を「ウバ」と表記し、耳で聞いた外来音を再現しようとするくふうが見られる。こうした傾向が『書生気質』の「初版」に見える。一方、昭和のはじめには、現代の語形に近づいており、日本人の発音を考えた語形が使われていることがわかる。例えば、[fi] を示すのに「初版」では現代では見られないような「フヒ」「フヒ」などの表記が見られたのに対して、「選集版」では日本語の音韻の範囲での表記である「ヒ」に変更されている。[v] の語形の変化を見ても同様のことが言えそうである。

「初版」と「選集版」とで語形が変化していないものについては、現代に引き継がれる語形が多く見られるのが特徴的である。外来音「ティ」「ディ」に対応する語は、「チ」「ヂ」あるいは「テイ」「デイ」「テ」「デ」が見られ、「初版」と「選集版」とで変化がない。現代では「ティ」「ディ」が出やすくなっているが、「チ」「テ」「デ」で定着している語も多い。例えば「ロマンチック」「ステッキ」「アイデアリズム（アイデヤリズム）」などは『書生気質』でも現代でもこの表記が使われる。外来音「トゥ」や「テュ」も同様である。現代では「トゥ」「テュ」の表記も見られるが、『書生気質』にある該当の単語は「ツー」「スチューデント」で、これらは現代でも「ツ」「チュ」が使われている例である。こうしたことから、原音に近い表記が使われることが多い現代でも、明治時代からの慣用が定着している語は、語形が変化していないことがわかる。

注

- (1) 国立国会図書館に所蔵されている『書生氣質』には、1887年に合冊になったものや、1886年に前編、後編に分けて発行されているものもある。今回、「初版」「選集版」のほかに合冊になったものも確認したところ、外来語の表記で、一部異なる部分があることがわかった。例えば、第3回の「初版」には「アンパンクチュアル（時間を違へる事をいふ）」（「選集版」の語形は「アンパンクチュアル」）とあるが、1887年の合冊では「アンパンチュアル〔不綿密〕^{ふめんみつ}」である。また、第7回の「初版」には「デビリツシユ、ワイフ〔外道面の女房〕」（「選集版」では「デビリツシユ・ワイフ」）とあるが、合冊では外来語がなく「外道面の女房」とあるだけである。第9回の「初版」に「ヴェイカント〔空虚〕^{くわく}」（「選集版」の語形は「ヴェイカント」）とある語は、合冊では「ウエイカント〔空虚〕^{くわく}」である。ただし、今回は、『書生氣質』の各版について比較することをテーマとしていないため、違いがあることだけを記すにとどめる。
- (2) 「選集版」には『日本近代文学大系』（角川書店・1974）に収録されているものもある。本稿では春陽堂のものを使用した。春陽堂のもので誤植が疑われるものは、一部『日本近代文学大系』掲載の語形を取り上げた。こうしたものは注釈に示した。
- (3) 「選集版」の記述は、「コンフツシヨン」に見える。『日本近代文学大系』（角川書店・1974）では「コンフエツシヨン」とあることから、本稿では後者の記述を示す。
- (4) 「father」のカタカナ表記は、「初版」で「フハザア」、「選集版」で「ファザア」という形に変化している場合がほとんどである。ただし、『書生氣質』の17回のみ「初版」も「選集版」も「フザア」となっている。
- (5) 実際の語形は「初版」は「ジヤステフワイ」、「選集版」は「ヂヤステフワイ」である。
- (6) 「初版」は「アンフホウチユ子イト」、「選集版」は「アンフホウチユネイト」と「ネ」の表記が異なっているだけである。
- (7) 今回テキストとした「選集版」の表記は、「ワオツチ」に見えるが『日本近代文学大系』（角川書店・1974）では「ウオツチ」とあることから、本稿では後者の記述を示す。
- (8) 『増訂華英通語』は、1860（万延元）年に福沢諭吉によって出版された英語の単語集である。英語の単語に中国語の訳が示されており、そこに福沢によって英語の読み方がカタカナで記され、日本語訳もつけられている。
- (9) 『NHK ことばのハンドブック第2版』（2005・NHK 出版）によると、現代の放送では「イエローストン」が使われている。

参考文献

- 榎垣実（1963）『日本外来語の研究』研究社
- 木村義之（2015）「近代文学における本文の変容をどのように考えるかー『一読三嘆当世書生氣質』初刊本と『逍遙選集』本文の資料性についてー」『言語事実と観点』（延世大学校）（36）
- 辻村敏樹（1992）『『当世書生氣質』の外国語・外来語』『ことばのいろいろ』（明治書院）
- 坪内逍遙（1885 - 86）『一読三嘆当世書生氣質』第1号～17号（晚青堂）

(1926 - 27) 『逍遙選集』(春陽堂)

(1974) 「坪内逍遙集」『日本近代文学大系』(角川書店)

米川明彦 (1985) 「近代における外来語の定着過程」『京都府立大学生生活文化センター年報第9号
(1984)』

(やましたようこ 本学大学院博士課程後期課程在学学生)